

沼尻縫一郎編輯
西南鎮靜記

初号

上
貳



沼尻絰一郎編輯全二冊

西南鎮靜記

東京

萬笈閣發兌

A 447



48-7806

西南太平記ト題號スルノ小冊ハ沼尻絰一郎ノ編輯ニシテ現今殆ト十五号全部三十卷ニ至テ滿尾ス時ニ該地ノ鼎沸未タ全ク鎮靜ニ至ラス僕去月汽船ニ乘シテ崎陽ニ着シ普ク戦地ヲ探偵シテ實況及ヒ義漢節婦ノ小傳ヲ得テ是ヲ演古ノ種トス爰ニ同氏西南鎮靜記ヲ編ノ際ニ僕ニ校合セヨト云再三固避スルト雖同氏曾テ不許仍テ見聞ノ俟ヲ校訂ス若シ謬說誤聞モ有ラハ諸彦能ク僕ガ杜撰ヲユルセ

明治十年九月

若林伯圓事

若林義行



西南鎮靜記

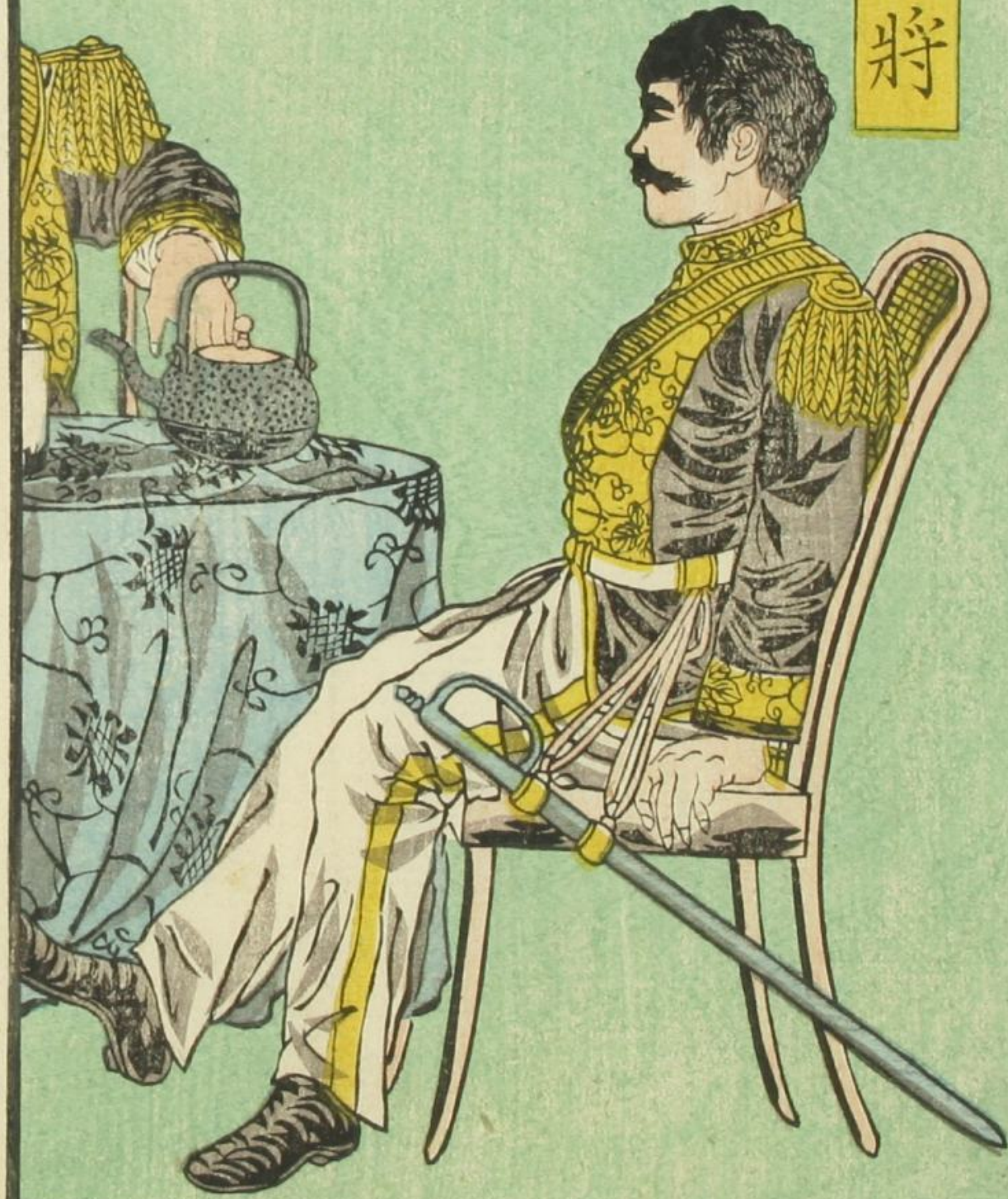
初編上

曾我少將



山縣參軍

鳥尾中將

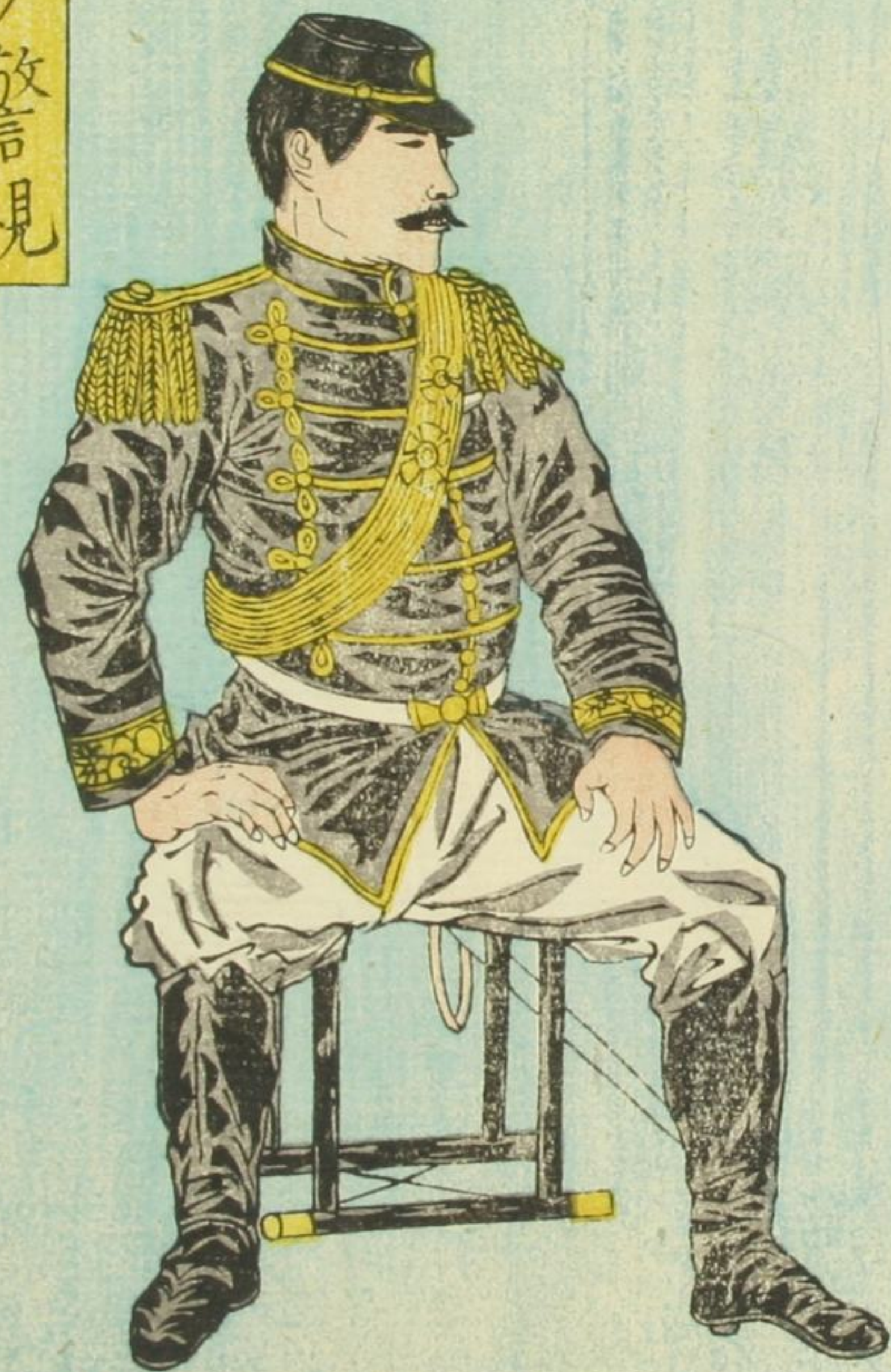


石川真淨已

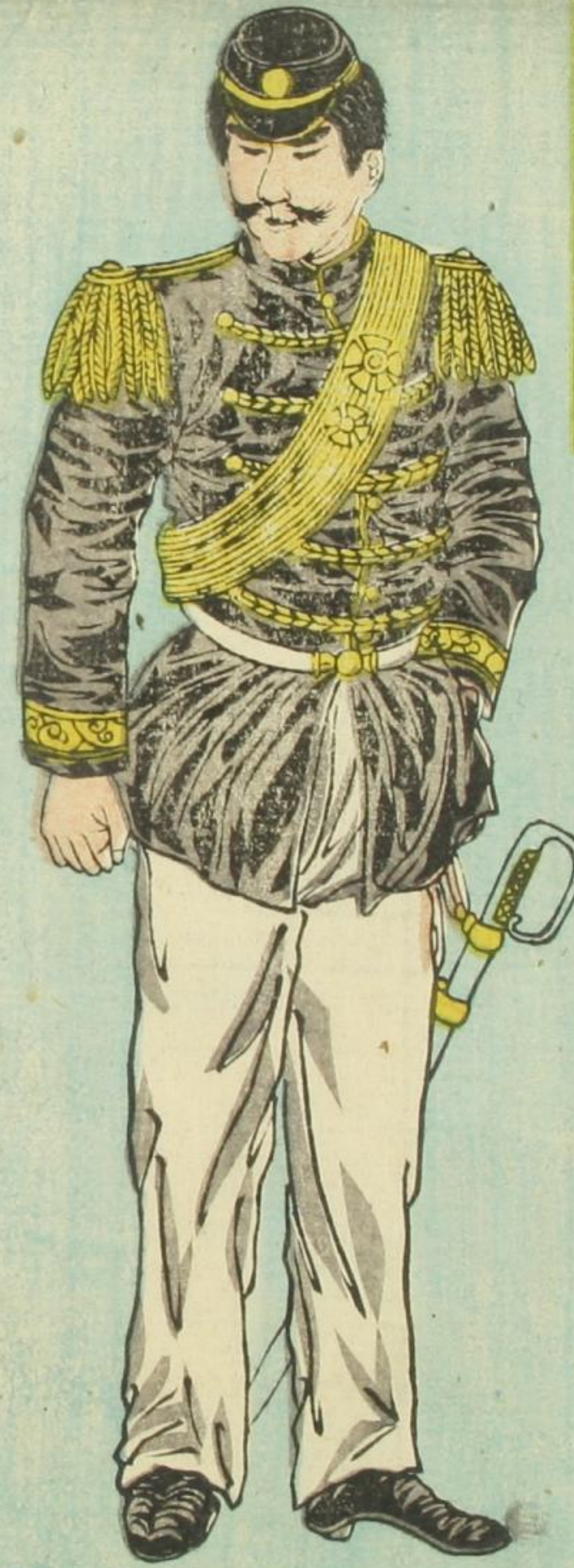
初痛上

石川真淨言

綿貫少敬言視



小澤大佐



と磯とつ風景の地あり此の濱の後ハ山脉連
り前面ハ海ふて櫻島の昔面を見る体ハ恰
も摂州須戸浦より一淡路島と望むが如
亦鹿見島の海岸直ふ市街より十町計り
奥又至りて士族町有り碁盤の目の如く四方
へ連続したり夫より後ハ殆ど屏風と立り如
く高山より其山路より肥後の水原へ出
るあり熊本又走る道ハ險要の地ハ肥薩の

堺々々三アウ坂あり隈川ハ代守土と過て緑
川託磨原の廣漠地あり此邊一圓戦地と
りて過る五月十八日午十二時三十分當團右
翼出水街道ふ備ふる兵一小隊為大斥侯兎
徒の背後字九郎右衛門山ふ出谷と隔て中
尾山の賊壘并陣小屋と砲撃せんと四方より
大砲小銃と連發一其砲聲萬雷の如く山岳
為小震ふ又至るも陣中の兎徒ハ更ふ屈せ

ず力戦せられたり且その兵最も強きが故
 双方互ひ小激戦して或ひの進み或ひの退き
 両軍大ひに窘むてと數度ありて未だ連
 戦勝敗あらんと官軍追々攻撃し遂に兎徒
 の狼狽しその壘を離れ凡百余名を出し之
 小應ず我兵連發之とカ骨し喊聲と發し午
 後一時三十分我が兵と線内より引上げたり
 中尾山の西南に在る官軍此機に乗つて

進撃す兎徒狼狽し走り去るの大隊長隈
 崎佐平治分隊長中馬善太郎を討取らんと
 軍兵の連發烈しくその砲聲空に轟ろき恰も
 霹靂の碎けて落るが如くありしかば兩長
 へ之に應撃し千變万化しその黒烟の隙
 と潜り此所彼處あり白刃を閃りし切
 込んだれど官兵へ之と事しゆせず遂に之
 と狙撃せられしあやまらず砲撃と共

又斃れたり官兵壹名と生捕たるところや
逆兵死骸二十計り其他小銃三十余挺弾
薬器械多く分捕たり亦大口と通むる
本道切道の壘と守る官軍も海と此の砲
聲と聞き進撃して深川より二合計り先
字大野とへ打ち入りく賊壘二ヶ所と乗つ取
りたり降伏壹人あり此の戦ひ午后第一時
より始り第四時と終る同日鬼ヶ島と進撃

一と苙びたる巧とを通ト峠と乗つ取り
二郎山と砲撃す兇徒狼狽して逃走りける
又今回警視局より多人數巡查を徵募せ
られ西京へ繰込るるより
行在所第六號の布達左の如し
内閣顧問從三位勲一等木戸孝允今日
午前六時三十分斃去候條此旨布告候
事



官軍進撃
一て隈寄
中馬と討
取る



明治十年五月廿六日 太政大臣三條實美

右御布告の通り久々の不快に付内外の
國手が肺肝と碎いて治療せられし由その
甲斐なきに皇國の為め惜むべしとも申す
様もなき次第なり然れば葬送の同公の遺
言みて東山の靈山へ佛送され五月二十九
日十二時の出棺とす
却説鹿兒島縣の士族有田藤七郎の別働

隊三旅團の巡查六百餘人の同隊にて御船
川に憤戦し各淺傷深傷を負ひ加世川堤
み引揚るる有田氏の烈敷戦ひ腰部み深
傷を負ひたまた心の逸れど歩行し味方
の勢の引揚るる後れ下りのと刀と杖と立
ての轉ぶ苦痛の体を味方と認るもの在于
救ひ出さんといたれども逆徒の尾撃と隔
られし心も引揚るるみぞ此時有田

百真筆已 初編上

も勢いきりひ盡つきる路みちの傍かたへ又また赤あか卧うすを逆徒さかの見み
るよりよりハラハラくと刃やいばを揮ありて取とり巻まき？既すも斯か？
よと見みえたるを有田ありたの恐おそろしく体ていももるるく命いのち
の惜あみ足とらねども云いひ残のこすべきこと有あ
ねねば暫まじく猶なほ豫よせられよと深傷ふか又また屈くせぬ
一言い言いふふ又また左さ右うるるくくバ斬きりも懸くららず如何いかあり
事ことぞと問とううけけららも有田ありたの五ご六ろく人にんの逆徒さか斬き
懸くららんと為なすを留とどめて开ひきも戦場せん又また赴おもむくよ

命いのちの豫よて無なききめめののと覚悟かくしつれれば聊いさ惜さまず
遠さ莫も一いっつつの所望しよあり我われも鹿か兒ご島しまの昔むかしふふ
て親族しん故こ舊きうも多おほかかるるやや又また從弟じゆ香田かう六ろく郎らう
の本ほん堂どう又またありと聞きか存命ぞんののうち對面たいして
囑まを置度おきことことややををああまま暫時ざんの命いのちを借かり
賜たまひて此儀このぎを果たまさせ給たまひてよと云いへば兎徒う
等らの合點あききて斯か迄まで今日けふの戦いくさひひ又また勝利しやうを得え
たる事ことるるを一人ひとり助たすけて連歸つれるとももささの

と督責もある間敷又然らるを伴ひ得させ
んと引れて本營又辿りけりといふ

一説又有田が懐中せしところの金田及
び手簿を此者共々皆持去りて今香田
が來らんふ暫く待てと言棄て出で
行ころの夜より傍へは焚る篝火の
消残る身も何時までと既往思ふ折り
から又從弟が出来れを有田の深疵の

苦痛も忘れ膝とすめて扱云ふやう懸
人賊徒とありうへに親子兄弟立別れ
て鎬と削るも珍らうからねば今更らふ
ふ及ばねと本日御船の戦ひは重傷を負
て退き兼其處にて斬るべうりも猶豫
と請ひて来りしと女々しとる笑ひ賜ひ
ぞ御身の知らねと東京又幼き女一人
あり我今爰に討るれば他は養食云ふべき

めの無心苦しく思ひつゝ又出發のとき遽
 しく引留めて父君何處へと問われし
 時遠くと云ひて歎きやせんと毎度の通
 り當直ふとり人ば聊安心して父君早く
 歸てよと別れのひり一語の今猶耳に残
 りつゝ腸を断ちちするを我亡後の如
 何ゆして養育たて賜らば此の上も
 無き恵もぞかり囁しつゝ唯是のそ諾

れるが今生又思ひ置更又なると漫
 涙み搔くれて語るを香田ハつぐと歩
 共又涙を拭ひるぐ親子の情のさゆ有
 りるん我存命てある上の養育んこと
 勿論なまど熊本城下を退いてより稀
 るる今日の勝軍又銳氣の十分加はり
 たれど大義み悖り我軍の何と
 て久しく保たんや囁とけり甲斐も

有田藤七
郎山中
於蘓生
する



るく我れ又續て討死せば再度孤獨
 の身とるつて如何なる憂目ふ遇ん
 も知もずハテ何とがると思案せーダ
 屹と思ひ付事ありけん何更るりと
 も我が為す俸又必ず従ひ賜ふべし
 此の本堂も官兵又襲ひ撃れて灰燼
 とるるの近きとあるべき斯て在すの
 最と危しと草鞋の紐と引締て有田

の傍へ差し寄り腕と採つて肩よか
 け負傷と恤り立出ると逆徒の隊中
 の者共が頻り不怪を問毎々香田ハ声
 と放ち此奴ハ同馬のりのまをば是より
 山へ引き以て行心の俦と斬るらん
 頻り途と急ぎつ或る山路と差し掛
 れば有田ハとらと計りかねて如何と
 るすやと引れ行夜の山路の何処とも

石門真浄己

初編上 一七

方角とさへ分とねと人跡断えたる地と
 おぼしく澗水の音或ひへ松風の声より
 外に聞ゆのみき山の傍に有田をあらう
 木の葉と聚て延と為し自己も其処
 ふ坐と占て夏の子細も告申さず斯る
 山路へ誘引いと嘸か疑ひ賜ふらん
 が先刻も申す通り愛女の事と托せ
 らる我さへ明朝とも知れぬ身みれ

暫く此處に身と忍び機と合せ
 味方の陣へ立帰つて保養されぬ官
 軍への君が大功當り愛女の為のそ
 らず此處にさしたる深山ありと戦地
 とありべき地はありねば潜て在す便
 りと腰搔探て取り出す兵糧さへも
 真ニツ不割て信義を顯はせろよ有田
 感入り生死の天に任せんのを此の

御芳志の忘るべからずさくづくと香田
 が麓とさく急ぎ行を見久り見送
 る一世の別れ其後日數十日餘り此の
 山蔭の日を送りし樵夫の稀も來
 れるを呼近づけし事の由を告げ熊本
 城まで送り呉れよと囁と容易うけがひ
 て有田を熊本へ護送せしうら病院ふ入
 らしめ創痍も追々快復せるハ實ハ天

助ともいふべきあり

茲に又戦地ふる抜群の勇をあつたり
 人の各隊も多かるべけんや東京鎮臺後備
 歩兵第一大隊第四中隊伍長代理戸村芳
 藏へ過る四月二十日の竹宮の戦ひに逆徒
 敗れて逃るを逐ひ頻りに進む横合より
 俄に起る逆徒の應援此隊と中も取籠
 餘さくと斬立るよこま邀撃官軍少ゆ



竹宮の戦
 小戸村勇
 進猛烈を
 為す



屈まる色もく勇進猛烈るるもぞ流石の
逆兵も撃ち立られしが取てかへ弱兵と
以て之に應じ別軍と以て陰に攻撃す
官軍甚ど苦戦するに一時引揚の令
あるも戸村芳藏の數人の兇徒等も前後左
右を圍まれたまはハヤ討死と見えたり
が少しもひるまは一人を銃槍ふて突倒し
逃る一人を砲撃するも兇徒の怒つ

再度奮激し二人が烈敷斬りつくるを又も
一人砲撃せしよあやまらず砲声と共に斃れ
たり一人を其場へ突殺し静々と隊中へ立
帰り来りし銃創刀傷も二三個所にあ
れども更も屈せず氣力少しも衰へざるの
實も稀なる勇士なりと

五月二十五日發宇都二等大警部澤井
三等大警部の両氏より其筋へ上申の

寫一左の如し

前畧戦ひある毎又生捕等ハ右之敵
 情承り候も賊勢人数も追々減少即
 今よてハ合して大九二万人位ふも
 少くあり候由弾薬等ハ多く人吉
 みて製造せる赴西郷ハ東西を奔走
 一更又居所を定めぬゆゑ又知る者
 一と桐野及び別府ハ人吉より鹿兒島

と奔走せるより當地并又佐敷攻口ハ
 逸見十郎太ガ将たるより肥後藩池
 邊吉十郎之又副たる趣賊も多くの
 脅迫されて出づ者ハ由ゆゑ又過日も
 佐敷征討第三旅團へ多く降伏せし
 よし近来ハ窮迫せしところにて民家
 又砲撃或ハ迫つて家財を強奪せり
 一弾薬も乏しき相違ハ無之この頃

西前真争已

初編上二二

の戦ひよの大小砲共弾と惜と數白発と
放ちたり

追て今廿五日午前矢筈山の兎徒と進撃
一壘二箇と乘取り直よ山上よ嚴壘と
築き哨兵と布く我手の死傷僅うみ
兩三人の内細谷警部も右手よ疵つく
戦状未詳るらず

儲も六月七日午後三時頃カクハン鬼ヶ嶽へ出

張す兎徒松尾上原の諸要害に砲壘と築き守
備嚴るり官軍直よ兵と出し既よ逆徒壘と
拔んと其砲声天地よ夷き萬雷の落るも斯
やとあやしまる遠よ十四ヶ所の砲壘と拔く
逆軍の敷手腦され防戦するに能はずして崩
れ立たり逆徒の死骸と捨て走る追撃し兵
と納めんとするよ又外より逆徒の一手久木
野の街道へ押出し官軍の横合と砲撃し

官兵の三手て分わち是これと防撃ぼうげきす逆徒ぎやくと立所たちどころみ走たる追撃ついげきして小川路おがわじより賊どくろと抜ぬけ者もの數十ヶ所すうじゅうしよ是迄これまで第三旅團だいさんりょだんの方面ほうめんに在あり逆徒ぎやくとも過半うわはん盡つきたりと第三旅團だいさんりょだんへ三浦少将みづらしょうしやうの手勢てせいあり又また十三日朝あさより山田少将やまだしょうしやうの手てハヲコマヲコハ田代たしろに向むかひ進撃しんげき大雨中あめうち激戦げきせん今朝けふあした遂つひに各所かくしよを陥おとれ尾撃びげきして吉田加久飯よしかひ野のの三個所さんごしよ等らと占得しめとたり

西南鎮靜記初編卷之上終



010190508140

